

カルダーヘッド「教えることを学ぶ中での『反省』の役割」

Calderhead, J. (1992) The Role of Reflection in Learning to Teach.
Valli, L. (ed.) 1992 Reflective Teacher Education - Cases and Critiques - State
University of New York Press. pp.139-146

SUMMARY

はじめに .

ここでは、教員養成段階における反省 (reflection) の問題点について論じている。教員養成段階では、student teacher (ここでは便宜的に「実習生」と呼ぶ) は、いかに教えるかについて学ぶ。それがどのように行われているか、複雑なプロセスを理解するのは困難であるが、その理解をもとに、教員養成の訓練プログラムが開発されなければならない。

1. 「反省」の概念化

反省とは何をすることであるのか。その考え方の比較。

Ciriello, Valli and Taylor 反省とは熟考のプロセスである。熟考とは、教室内に内包している様々なルーティン化したものの、論理的、規範的、政治的な意味を外化するということである。

McCaleb, Borko and Arends 反省には専門的知識ベースが必要である。そのベースは実験的な調査研究の批判的検討を通して得られる、教授と学習についての言語および思考方法である。

Ross, Johnson and Smith 反省的教師は、個人的な教授哲学を持った人である。自分や他の教師の信念を批判的に検討することで、教授と学習をコヒーレントな関係でとらえることができる。

共通点 自らの実践と、それが生じた文脈を記述することができる。

2. 「反省」の促進

反省を促すような教師教育プログラムをどのようにつくるか。

	種類
アプローチ	・地域・価値といった広い面から / ・自分自身の授業実践における教授・学習・カリキュラムについて
焦点	反省のプロセス / 反省の構成要素 / 反省のための知識ベース
道具	ジャーナル / 学習日誌 / 協働・ディスカッション

一般的な方法を提示できるわけではない。

3. 「反省」を学ぶ中での個性への気づき

- ・実習生らがそれぞれ違った知識と見通しを持って訓練にのぞむし、違ったやり方で反省的な教授を進めようとするので、実際的な効果は予測しにくい。
- ・また指導する教師も、分析を勧めるというよりは、方法を教えてしまう。
- ・指導する教師は、実習生が伸ばしたいと思っているような態度、技能、知識やそれらがどのように促進されるかということだけでなく、実習生の専門的成長を進める中での代替的な方法を意識しなければならない。

4. 反省的教授への障害物

大学の指導教官と実習校の指導教師にかかっている部分大きい。彼らは実習生の専門的成長について複雑な概念を発展させ、生徒の様々な変化をモニタリングしなければならない。

< 障害 > 実習生の専門的成長に関する一般的な知識の不足

< 障害 > 制度の中にいる自分を見いだしたとき、典型的な価値や期待、一般的に認められた実践が、反省的実践を促すものとして支えにならない。

いわゆる良い実践についての様々な信念と、当然のこととされる実践や手順の中にある様々な価値がある中で、大学や実習校の指導教師自身が反省的実践者になる必要がある。

5. 反省的な訓練プログラムの開発

・基本的なルールがまだあるわけではない。指導する教師らがやろうとしていること、向かおうとしている方向を検討することが求められている。

・ Van Manen の反省の3つのレベル

技術的合理性：一般的に認められた目的を達成するために、知識を十分に適用する

実践的行為：代替的な行為とその結果に暗黙にある価値の検討

批判的反省：教育的実践の倫理的な側面

- ・しかしこの3つのレベルを養成段階で行うのは可能か？あるいは中堅教師？
- ・教師集団の成長か、あるいは短期的な個々の教師の成長か？

< 課題 >

これらの課題に答えていくためには、養成プログラムにおける教師教育の経験と評価を行っていくしかない。

養成段階のみを考えるのではなく、実習生が教師となった後も追跡する必要がある。また、初任者だけでなく、実習生を指導した教師はどうか。すでに学校に勤務している教師がどのように専門的に成長しているのかを研究対象にすべきだ。

つまり、反省的教師の養成より、まず反省的な学校、反省的な教師教育者が必要だ。

DISCUSSION

- ・ reflection と一言で言っても、やる内容は多様だと感じた。
- ・ 「よい授業」をどう考えるかも、個々の教師によって多様だ。自らに高いハードルを課す人ならば、どんな方法で reflection しても有効だろうが、そうでない人も巻き込んだ reflection はどのような形なのだろうか。
- ・ 学校を基盤にしたカリキュラムの割合が増えてくれば、自ずから教師集団によるスキルアップが問題になってくるだろう。



Japan Women's Univ. (1999/12/2)

Ochanomizu Univ. Elementary School (1999/12/1)